

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月1日

神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。－創世記19:29

アブラハムは神がソドムに対して裁きを執行されることを理解するとただちに祈りました。その際の彼の祈り方はもっとも啓発に富むものです。彼は神に対してその町をとどめ置いて下さるように祈ったわけではありません。そうではなく、彼の求めは神の御性質に訴えかけるものでした。彼は神が義なるお方であることに基づいて祈ったのです。それが彼の祈りの秘訣でした。深い謙遜と強い熱心さをもって彼は神に質問を次々に投げかけたのです。その質問はみな彼の求めるところでした。しかもそれらはすべて神の義に基づいていたのです。最後の祈りを捧げた時、聖書は告げています、「主は去っていかれた」と。ある人々は、なおもアブラハムは祈り続ける必要があったとみなしているようです。しかし、彼は神を知っていました。また何よりも祈りの秘訣を知っていたのです。彼のとりなしはその親戚を救いました。なぜならその祈りが義に基づいていたからです。神がその町を滅ぼされる時、神は「義人ロトを救い出された」のでした(2ペテロ2:7)。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月2日

ロトの妻を思い出さない。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。-ルカ17:32f

私が誤解していない限り、この箇所は新約聖書の中で唯一携挙の招きについて語っている節です。その瞬間に私たちの真の心の宝がどこにあるのか、露わになるのです。もしそれが主御自身であるならば、私たちは決してふり返ることはないでしょう。私たちは容易に、それを与えて下さるお方を差し置いて、賜物の方により心を惹かれる傾向があるのです。否、それにとどまらず、私たちは神御自身ではなく、神の働きの方に惹かれるのです。しかし何よりも一番高いところに心を置いている者は、決してその賜物によって引き下げられることはありません。喩えて言えばこうなるでしょう。今、私が本を書いていたとします。すでに8章まで完成しており、あと1章を書くだけのところにきています。そしてその章のために主の前で真剣に葛藤しているのです。そこに、「今、ここに昇ってきなさい」との声がするのです。その時の私の反応が「主よ、この書きかけの本はどうなるのでしょうか？」だったとします。私が家の中で階段の下でなしているこの貴重な仕事自体が、私をそこにピン止めしてしまうかのようです。それが私を地上に引き留めるくさびになってしまうのです。ここでの本質的な問いかけはこうです、私の心はどこにあるのだろうか？

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月3日

神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。-ペリピ2:13

今や私たちはキリストのうちにあり以上、神の道徳的基準は決して変わることはありませんが、それを満たすのはもはや私ではありません。神を賛美します、神は御座からその律法を与えられた方ではありますが、今や私たちの心のうちにおいてそれを守られる方なのです。律法を与えた方御自身がそれを守られるのです。神は要求をなされますが、それをご自身で満たされるのです。私たちが自分でそれをなそうと努めている間は、神は何もなし得ません。私たち自身がそれを守ろうとすればするほど、何度も何度も失敗することでしょう。問題の本質は、私たちは神の御心を行うにはあまりにも弱い者であることですが、しかし、それを神になしていただくほどには弱くないのです！自分でできると思う幻想を完全に打ち破られた者だけが、絶望の中で、すでにすべてをなす用意をされている神にすべてをお委ねすることができるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月4日

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。-1ヨハネ5:14

信仰は神の御心の摂理の中でのみ自由に働きます。その御心の外においては、私たちいくら叫んでも、信じて、信仰によって動いても、さらにはそれ以上の何かをしたとしても、知覚し得る結果を得ることはできません。神が支持されないからです。私たちの自分のラインの中で何かを信じる努力をしても、山のような信仰を積み上げたとしても、問題のからし種ひとつも動かすことができません！私たちの自分勝手な善に基づく行動に対しては、神は責任をお取りになりません。神の力は神の御心の中において発揮されるのです。ここで物事を正当な路線に置きましょう。その時、私たちは最大の試みの中でさえも大胆さを持つことができるのです。なぜなら、「神が聞いて下さる」からです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月5日

あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、……1ペテロ1:5

神の守りの力には条件が付いています。私たちは信仰によって守られるのです。私たちが神に信頼しないならば、神は私たちを守ることはできません。神の保護の力を知るためには、神の約束を心から信じる必要があります。試みの際に疑いを心に抱くのであれば、私たちは神の守りの力を損なっているのではないのでしょうか？サタンの誘惑に対して私たちを堅く立つものとするのは、私たち自身ではありません。毎朝、起きるとき、主に申し上げる必要があります、「昨日、私を守ってくださったことを感謝いたします。今日、どのような誘惑が私にもたらされ、また私がそれに堪え得るかわかりませんが、それを処理して下さるあなたに、再度、信頼いたします」と。暗黙の裡に、主に、私たちの力の神に頼りなさい。そうすれば、敵の放つ邪悪な火矢がいかなるものか予測できなくとも、私たちは何か素晴らしい囲いによって守られるのです。それが信仰の城壁です。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月6日

祭司のくちびるは知識を守り、人々は彼の口から教えを求める。-マラキ2:7

いわゆるリバイバルと言われる現象が誤った基礎の上に起こることがあります。そこでは霊的賜物が出現してもキリストの務めが欠如しており、それはあたかも道具は揃っていたも、それをを用いる目的が見失なわれているかのようです。さらに悪いことには、そこにキリストがおられないと、賜物が無意味になるばかりでなく、欺きになることです。それらは少なくともキリストの務めにそぐわない様で真似されることがあり得るのです。主の民にとって問題なのは、説教、祈り、あるいはあなたが有する賜物がいかなるものかではなく、それらがキリストの知識をもたらすかどうかなのです。病院においてふたりの看護師がまったく同じスプーンを用いる際に問題なのは、そのスプーンによって患者に何を与えるかです。ひとり癒しをもたらす高価な薬を、他方は単なる対症療法的薬を与えるのです。本質は私たちが何を 提供しているかです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月7日

昔の人々に、・・・と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います-マタイ5:21f

律法による束縛とは、昔の生き方の命令に対する強固な執着であり、現在の主御自身のお言葉に従うことを阻害する状態と定義できるでしょう。私たちは律法は生き方の標準であると見ることができます。しかしそれは固定化された標準です。私たちが少年の頃、体育の教師は私たちの年齢と能力に応じて、高跳びのロープの高さを上げ下げして調整してくれました。標準は調整によって変化し、私たちの成長を期待した余地が残されたのです。しかし律法の標準は厳格です。それは私たちに基準未満の余地を残しません。

「しかし、わたしはあなたがたに言います・・・」。これらの言葉はどの時代にも適用される原則を含んでいます。私はよく次のような議論が展開されるのを聞いたことがあります：「それはカルバン(あるいはウェスレーやダービー)時代のものだ！」と。しかし彼らの時代は「昔の」時代であり、それはあなたにも、私にも、昨日のことなのです。もし、私が一か月前になしたことを主が今日と言う日にもしなさいと言われるのであれば、それはいのちです。しかし一か月前にそれをしたので、今日もすると言うのであれば、それは律法です。律法は一週間あるいは何世紀でも古いものとなり得ます。しかし御霊の導きは24時間であれ、古くなることはありません。重要な点は、今日、主と共なる新鮮な歩みをしているか、ということです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月8日

この女は、乏しい中から、あるだけを全部、生活費の全部を投げ入れたからです。-
マルコ12:44

今日私たちは「きれいなカネ」と「汚れたカネ」についてよく語りますが、神の目にあつてはただ「不義のマモン」が存在するだけです。このことをテストする方法は、カネが自分を神へと導くのか、それとも神から遠ざけるのか、と自問するだけで良いでしょう。神とマモンに兼ね仕えることはできません。では、サタンの関心事に仕えるものを、神の国の建設のために用いることは可能でしょうか？カエサル像と神の似姿を帯びるものは、切り分かれたる必要があるのです。

もしあなたのカネがこの世のものであれば、あなた自身が世から分かれたる必要があります。単に神の宝物蔵へと金を捧げることによって、あなたが捧げたものの性質は変わりません。あなたの生活がそこから離脱しない限り、そのカネがサタンの王国から神の御国へと移転されることはあり得ません。パウロはマケドニア人について、「はじめて自分自身を神に明け渡した」と語っています。今日、カネについて言えば、サタンの資源は無尽蔵と言える一方、カネが神の手において有効に用いられるためには、神御自身に自分自身を明け渡す人々がどのくらい存在するかにかかっているのです。あなたの稼いだカネを聖所の通貨へと即座に変えることができると確信してください。サタンの帳簿に記録されていたカネを神の口座へと振り返るのです。どのように？送金するのではありません、神へともたらずのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月9日

取税人や罪人の仲間だ。-ルカ7:34

私は、救い主が罪人の友であることを見てから、普通ではない、難しい人々がたくさん主にもたらされる経験をしました。ある時は若い女性が私の元に来て、自分は救いなどは要らないと叫んで、私を攻撃しました。彼女は、自分は若いし、良い生活を送っているから、罪の生き方を離れるつもりもなく、救いを受ける気持ちない、と言いました。しばしの間彼女の罵詈雑言を受けたのち、私は彼女に「祈りませんか」と申し出ました。彼女は怒りつつ、「いったい何を祈るのと言うのか？」と答えました。「私には分かりませんが、最初に私が祈りますから、続いてあなたがこれまで私にぶつけたことを主イエスに語ってみてください」と言いました。「おお、そんなことはできません！」と、彼女は不意を突かれたように答えました。「いえ、できますよ。主イエスは罪人の友ですから」と私が言うと、それが彼女の心に触れたのです。彼女は祈りました。それはきわめて伝統的でない祈り方でした。しかしその瞬間から主は彼女のうちに働きを開始されました。そして数日後には彼女は栄光の救いを受けたのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月10日

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる。-詩篇55:22

多くのクリスチャンが祈りの生活にあって神の御用を果たしていません。それはあまりにも多くの重荷を負い込んでいるからです。彼らは祈りにおいて重荷を解き放つと言うよりは、それらを溜め込んでしまうのです。そしてついにはその重荷で押し潰されて、まったく祈ることができなくなるのです。

たとえばあなたがある人に援助を求めたとします。ところがその人自身がすでに手一杯の状態であるとしたらどうでしょうか。彼の助けを求めても役に立たないでしょう。同様に、神があなたに任せられた重荷で押し潰されていたとしたら、どうして神はそれ以上のことをあなたに委ねることができるでしょう。祈りの務めのためには解放された霊が必要なのです。そうでないと神の働きは大きく損なわれるでしょう。あなたは自由の器として、神の御用に当たりたいと願いますか？そのためには神にすべての重荷を委ね、霊的な解放を求めなさい。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月11日

そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできない-1コ
リント12:21

初期の上海における私たちの働きにおいては、私は告白せざるを得ませんが、集会のレベル・アップのために努力しました。特に祈りの集会において、かなり高い標準を目指したものです。結果として、私はある種の兄弟たちの祈り方に深く失望したのです。何とも嫌な気分を覚え、そのことを語りました。なんと私は間違っていたことでしょう！

それからしばらくして、私は主によって脇に外され、物質的欠乏に見舞われました。私は懸命に祈りました。しかし、私のその強烈な戦闘的祈りは私をどこへも導きませんでした。ついに主は私に語られました、「あなたはある兄弟たちの祈りは弱いと考えました。彼らを招いてあなたの必要のために祈ってもらいなさい」と。それはチャレンジでした。私は彼らを招き、彼らは私をたずねてくれ、膝をかがめて祈りました。私の人生で初めて、彼らの純朴かつ率直な祈り求めに感謝することができたのです。それにもまして、主はその祈りに応えられました。私は立ち上がることできたのです！

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月12日

御国が来ますように。みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように。
-マタイ6:10

私たちはこの祈りをすべきです。「あなたの御国が来ますように！」と。御国が勝手にもたらされるのであれば、その祈りは別に必要なかったでしょう。しかし神の民は祈る必要があります。それにより、その叫びに対する答えとして神のわざがなされるのです。「あなたの御旨がなりますように！」。そうです、しかしどこにでしょうか？「地上に」です。今日神の御旨がなされていないのは地上のみです。では神の御国はどのようにもたらされるのでしょうか？それは被造物の意志と創造者の意志が一致することによってです。それらは共にサタンの反逆的な意志を駆逐することを求めるのです。なぜなら祈りはつねに三方面に向いているからです。祈りは祈る対象、祈るための相手、対抗する対象です。地上には対抗すべき対象が存在します。その意志は神の御旨に敵対しているのです。その反逆的意志に対しては、神の意志は単独では働きません。神は私たちの祈りを待っておられるのです。主の祈りは私にとって祈りの模範であるだけでなく、それはまた神の心を啓示しているのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月13日

まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。-ルカ18:7

今、ひとりの男があなたの家に押し入り、あなたの主権を侵して居座る場面を創造してみてください。あなたはどうしますか？ 地方裁判所に出向き、その地の法律に訴え、彼に対する命令を得るでしょう。そして法的な命令で武装しつつ、彼を追い出すでしょう。むしろ彼は鎖につながれなくて幸いだったことでしょう。ところがこの世の状況もこれと変わることがありません。神の「行政命令」は、この世の不法な占拠状況に対して発効されています。あの者は出ていくべきなのです！ 問題はサタンにとって神の国の法律は異国の法律なのでしょうか？ カルバリにおいて神の国の優位性は確立されています。十字架において、キリストはサタンの法的根拠を完全に打ち砕いたのです。今や、教会の出番です。すなわち別の法則を機能させるべき段階にあるのです。この喩えにあるやもめのように、「神よ、私の敵に対する裁きを執行してください！」と、神に叫ぶのです。彼女はまずサタンに対する立ち退き命令を得て後、彼を追い出すのです。神はそのような叫びを待っておられるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月14日

**あなたがたは何の権威によって、また、だれの名によってこんなことをしたのか。-使徒
4:7**

私たちは主の昇天によってもたらされた全能の変化に目を置く必要があります。イエスの御名はナザレの大工の称号と共に、御座に座すお方のアイデンティティとして確立されましたが、さらにそこに止まりません。その御名は地にあるもの天にあるもの、さらには地の下にあるものがすべて膝をかがめるべき名であるのです。ユダヤ教の指導者たちでさえ、弟子たちが足なえを癒した時にこのような質問をすることにより、ひとつの名にそのような権威が与えられていることを認識していたのです。

今日、その御名は神が御子にあらゆる権威をお与えになったことを告げています。その名前自体に力があるのです。しかし、さらには、その名は御子のものであるばかりでなく、「人々にも与えられて」いるのです。神はその名を私たちが用いるようために、その権威を私たちにも委ねられたのです。主イエスが最後の道行をされる過程において、三度、「わたしの名によって求めよ」と繰り返されました。主は私たちに、「わたしの名によって求めるものは、何でもかなえてあげよう」と言われた時、何と言う確信と共にその約束を私たちに委ねられたことでしょう。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月15日

わが君、ダビデ王の王座-1列王記1:37

「ダビデ王」と民らは親愛の情をこめて呼びました。確かにダビデは1インチの細部に至るまで王でした。荒野で牧者として父の羊を牧しつつ、主の名によってライオンを追いはらった時も、彼は王でした。後にゴリアテがイスラエルを脅し、サウルですら恐れおののき、自らの民を治めることができなかった時も、ダビデは恐れることはありませんでした。王の心の中には恐れはないのです。しかし何にもまして、サウルからの逃亡者であった時、彼を追いつめつつも、直ちにその追跡から解放されるであろう一撃を与えることがなかったのです。これこそ真の王たる者のあり方です。自分自身の霊を制御できない者は王とはなり得ません。真の王とはあらゆる環境の下においても王であるのです。彼はすべてを支配するのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月16日

神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、…喜びをもって—コロサイ1:11

使徒職には信任状が付与されます。真の神聖な委託があるところには、使徒のしるしが必ず伴うのです。パウロにはその真の委託の証明が豊かに伴いました。「私は取るに足りない者」と言いつつも「使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです」と第二コリント12章で彼は書きました。これから私たちは、忍耐こそが霊的力の証拠の中でも一番最初のもものと分かります。それは主に「遣わされた者」としての私たちの召命の実際性をテストする絶えざるプレッシャーの下に留まり続ける能力なのです。喜びとと共に忍耐と寛容を尽くすことは、「神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされ」ることを知り得た者のみがなし得るのです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月17日

そこで人々は、彼らの食料のいくらかを取ったが、主の指示を仰がなかった。-ヨシュア9:14

神の前での罪には二種類あります。ひとつは神が命じられた時、それに従わない罪；もうひとつは神が何も命じられないのに自分勝手に進む罪です。ひとつは反逆であり、神が命じたことを行わないことです。もうひとつは思い込みであり、神が何も求められないことを行うことです。神のための業を行うとき、大切なことは、神が求められることに基づいて行うことであり、単に善か悪かの基準にもとづくものではありません。私たちはしばしば、自分の良心が禁じていないから、あるいはそれ自体がきわめて善なるものであるゆえに、それで一步を踏み出し、行動に踏み切る十分なる根拠とするのです。兄弟姉妹よ、主人のために何かをなす際において、真にその方にお仕えするためには、その方の指示を待つことが大切であると思いませんか？

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月18日

それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。-ローマ14:10

ここでは二つのことが禁じられています:「さばくこと」と「侮ること」であり、外なる行為と内なる態度です。私はこれまでに、公に兄弟を裁く表明をする程度までには至ったことは多分ないかも知れません。大変結構です。しかし私は彼を不愉快にさせる程に追いつめたことはなかったでしょうか？私が見ているように見ることができないとして、兄弟を哀れな者とみなしたことはなかったでしょうか？兄弟が弱くまたエキセントリックであるとして、彼を貶めたことはなかったでしょうか？もしそうならば、私はまったく混乱に落ちているのであり、私が次になすことは彼よりも自分が優れていると考えることでしょう。彼を侮るのであれば、自分を過大評価していることは間違いありません。自分自身を霊的な強者と分類しているのであり、実はそれにより自分の肉によって神を裏切っているのです。もちろん神は私に善と悪を識別する力を下さいましたが、しかし他者を私の識別力の犠牲者としてはならないのです。裁きの座はキリストのものであり、それは未来の事です。それを今ここであえてなそうとする者は一体何者なのでしょいか？

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月19日

もし、食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。-ローマ14:15

人に例証をもって教える場合、議論に陥らないまでも、大胆になり過ぎるくらいがあります。たとえば、ここでは、良心が肉を食べることを禁じている兄弟に関して言及されています。さて、私たちはどうすべきなのでしょう？彼の眼前に座り込んで肉をたらふく食べ、クリスチャンの自由がいかなるものであるかを示すことは無意味なことです！彼と議論することはないにしても、あちらこちらに肉を置き散らしてキリストにある自由がいかなるものかを示すべきでしょうか。それは彼を助けることでしょうか、それとも「滅ぼす」ことでしょうか？この節に続く聖句を見てみましょう。「議論によって、滅ぼさないでください」ではなく、「あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください」とあります。そこで、そのような問題について兄弟と私が異なる見解を持っている場合、その問題を表に出すのではなく、彼の良心にそのことを訴えないようにするべきなのです。神は彼を決して傷つけることのないように命じておられます。なぜでしょう？それはキリストが彼のために死なれたからです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月20日

神の不動の礎は堅く置かれていて、それに次のような銘が刻まれています。「主はご自分に属する者を知っておられる。」-2テモテ2:19

人々は去ることがあります。フゲロとヘルモゲネ、ヒメナスとピレト、そしてすべてのアジアの人々がパウロを離れ去り、主に対する不真実を証明しました。彼らのそのような状態を見る時、私たちは周りを見回し、次は誰だろうといぶかしがるのです。一時間も経たないうちに、多くの者が信仰を失っており、またその標準が引き下げられているのを知る時、容易に混乱に陥るのです。神の子供たちの信仰がそのように変化するとしたら、変化しないのは何だろうか、と疑問を持つのです。しかし、考えてみてください。私たち自身が主を捨てる場面がはたしてなかったでしょうか？ 私たちの人間性を深く知るために、よく注意を払うべきです。神のみが知っておられるのです。ここで御霊は何を語っているのでしょうか？ 主はご自身の者たちを知っておられる、とあります。私たちは過ちを犯すでしょう。しかし、神は決してなさいません。人は失望させるでしょう。しかし神は決してなさいません。そしてここにある真理、主は知っておられることは確固としたものであり、決して変わることはないのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月21日

ですから、あなたがたの体をもって神の栄光を現しなさい-1コリント6:20

イスラエル人の宿営には何百と言う天幕が張ってありましたが、他のものとはまったく異なる一つの天幕がありました。普通の天幕においては、あなたは飲み食いや断食、仕事や休息、歓楽や禁酒、騒ぎや静粛など、望むがままになし得るのです。しかし、その天幕においては厳粛さと壮言さを命じられるのです。そこに近づくにつれ、あなたはさらに静寂さを保つべきことを感じるでしょう。そしてその前に立つのであれば、厳粛なる静寂さの中で頭を垂れることでしょう。なぜそれはそのように特別なのでしょうか？外観は通常の物質的なものでありますが、内側には生ける神のシェキナの栄光が満ちているからです。「あなたがたの体は神の神殿であることを知らないのか」。新しい誕生の際に厳粛なる事実が私たちに成就したのです。すなわち神御自身が私たちの心をご自身の住まいとされたのではなかったのでしょうか？

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月22日

また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。-黙示録21:21

真珠は他の宝石とは異なり、命を持つ被造物から生み出されます。それはいのちの産物なのです。死と破壊に抗しかつ勝利する命です。真珠貝が傷を受けた時、秘められたまま、その深い処から真珠が生み出されます。イエスのいのちが、その肢体である私たちに対して注ぎ出されたのは、イエスが受けられた傷によりました。神聖なる奇跡によって「栄光の教会」が存在するのであり、それはキリストの完全なる徳性、また欠けのない真実を通してなされたのです。そしてマタイ13章が示す通り、その素晴らしい真珠は御父にとってどれほどに貴重なものであることでしょうか。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月23日

わたしはあなたたちと共にいる、と主は言われる。-ハガイ1:13

神は御自身のしもべたちに対して預言の賜物を与えられ、またご自身の教会に対して預言者を備えられるのです。預言者とは神と共なる彼自身の歴史を持つ者であり、その人生において聖霊の靈的形成の御業を経験した者です。私たちは時として、自称説教者候補の者たちから、説教を用意するのにどのくらいの時間を費やすのか、と問われます。私の回答はこうです。少なくとも10年、いや、おそらく20年はかかることでしょう！少なくともこの論点に関しては、箴言が語る、「老人はすぐれている」ことは事実です。神にとっては、その説教の内容もさることながら、説教者がいかなる者であるかが重要なのです。神は今日の御自身のメッセージを語るために用いるべく、その内側においていのちの働きをすでに成した者たちを預言者として選ばれるのです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月24日

また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。-ヨハネ11:26

イエスは人にいのちを与えるために来られました。このことを念頭に置いてヨハネの文書を読んでください。誰でも彼を信じる者は永遠のいのちを持ちます。彼はいのちの水であり、いのちのパンです。しかも、「さらに豊かに」いのちを与えて下さるのです。それのみでなく、イエスは自ら死なれました。それによってイエスは私たちにとって復活であり、よみがえりのいのちそのものになりました。

危難と困難な時には、自分のいのちを守ろうとしましょう。なぜなら、何よりもまず大切なのはいのちだからです。南京が日本により爆撃された時、それは戦慄するような死と破壊の光景が展開しました。かつては瀟洒な家屋が建っていたのですが、今や瓦礫の山と化してしまいました。「だれか生きているのか？」と誰もが心に思いました。突然ひとつの瓦礫の山が動きました。梁が脇にやらると、一人の男が這い出して、埃とレンガの破片を払いのけました。彼はそれができたのです、なぜなら、彼はいのちを得ていたからです！

私たちが生きるのはイエスのいのちによります。それは死を経たいのちです。「わたしは生きている・・・わたしは死とハデスの鍵を持っている」と、イエスは宣言されました。死者をよみがえらせる神に頼ることこそ、もっとも安全な道なのです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月25日

箱の中には、二枚の板のほかには何もはいていなかった。-歴代誌下5:10

二枚の石の板に書かれた律法は神の民を訴える永遠の証拠となっていたことでしょう。その要求に応えるには彼らは無力であり、その二枚の板が契約の箱の中に収められていなかったならば、それによる罪定めと裁きのみを感じていたことでしょう（1サムエル6:19と比較）。アカシア材と金でできた契約の箱が、私たちの救い主であるキリスト御自身の予型であることはすでに明らかでしょう。彼は私たちと神の裁きの間に立たれるのみでなく、御自身の人間性において律法を「完成」させるために来られました。そこで、今や、私たちを訴えていた板の上の文言は、私たちのために契約の箱の中に置かれたのです。このゆえに証しの箱は契約の箱とも呼ばれるのです。「天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月26日

わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。-マタイ26:39

イエスが来られたのは御父の御旨を行うためでした。そこで私たちには、主がこのような祈りをされる必要があったことは、理解しがたいものと思えるのです。しかしこの祈りはとても重要な区別に関して光を与えるものです。明らかに主にとっては、このような祈りをすることができたのですが、しかし、御父の御旨を放棄することは考えられないことでした。要するに、この杯は御父の御旨の次に置かれるべきものでした。それは神聖なる御心が表現を得るための媒体であったのです。この場合は十字架における死のことです。主はご自身のあの苦難と共にではなく、あらかじめの計画通りに取り去られたのです。主がその杯を飲み干されたのは、それが杯であったからではなく、御父の御旨であったからです。

イエスにとってはその「杯」は尻込みするものであったのですが、私たちにとってはそれ以上に常に保持すべきものなのです。私たちにとって危険なのは、神聖な神の計画と共に、自分で「何か」を教義的に保持することです。しかし神の用意された個々の杯に関しては、私たちはきわめて曖昧な態度に終始するのです。私たちが高らかに何かを宣言することではなく、私たちの御父の現在の御旨こそが重要なのです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月27日

わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。-詩篇40:8

かつて、神が私をある務めへと召されたことが、一点の疑いもなく分かった時があります。しかしその時まで、私は重い病の中にあり、それを果たすためにはあまりにも弱い状態にあったのです。そこで私は神に強さを求めました。力を下さることが神の御旨であり、それによって私は任務を果たし得る、と考えたのです。そのことについて何度も何度も祈りました。そして三カ月が過ぎました。すると神がこう言われたようでした。「あなたは十分に祈りました。それゆえにそのことを手放しなさい！」と。その時、私は海岸を杖をついて歩いていたことを覚えています。私は立ち止まり、その杖を砂の中に頭が埋まるまで埋め込みました。そしてその上に立ち、宣言しました。「私はここで自分の肉体的必要の問題を放棄します！」と。私は歩み出しましたが、ほどなくしてその肉体的弱さが私の上に戻ってくるのでした。私は考えました。確実に神の私に対する目的は、私の強さが新たにされることによって成就すべきであると。そこで私はしぶしぶと再び祈り始めました。しかし自分をチェックするのでした。私は神の御旨を自分の必要のレベルにまで卸していないのだろうか？杖を埋めたところまで戻り、それを指し示しました。そして、「主よ、これが私とその問題を放棄した証拠です。私はこの杖を二度と取りません。弱かろうと強かろうと、私はあなたの御意志を行います」と言いました。その日から、自分の必要を放棄して、自分を神の御用に差し出すとき、私の肉体的必要は驚くべきあり方で解決されることを経験し始めたのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝ 荒野に宴をもうけ ＝

ウォッチマン・ニー

10月28日

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの知的な礼拝です。-ローマ12:1

この節は私たち個人のレベルを超えて、全体に益になるところまで私たちを導きます。「捧げる」ことは個人のことですが、礼拝(奉仕)は全体のことです。主の元に捧げられる多くの体があります。しかし、その結果は一つの生ける供え物です。すべての神に対する知的な、あるいは合理的な奉仕とはこのようなものです。それは本質的にはひとつの奉仕であるのですが、私たちも個人個人としてその中に分を持っているのです。誰も自分の捧げ物が価値のないものであると考えるべきではありません。なぜなら、それは多くの個別の捧げ物の中にあって、大きかろうと小さかろうと単独のものとはみなされないからです。それぞれのいのちは主に明け渡されるべきものであり、それらがひとつになって完全なるものとされ、神に受け入れられるものとなることを確信すべきなのです。そして神が満足されるのであれば、どうして私たちが満足を覚えないことがあり得るでしょうか？

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月29日

それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。-ヨハネ17:21

神の知恵が靈的諸勢力に対して現されるのは「教会を通して」です。私たちが御霊により神の住まいとされるのは「共に」です。今日、神の子供たちがひとつの体として機能していないために、彼らは漏れのある器のような状態にあります。ガラスの容器を粉碎したら、どうなることでしょうか。それぞれの破片には僅かの水が付着するだけで、粉碎されていない容器に溜まる水量に比べたらほとんど無に等しいのです。靈的にも同じことです。個人は二つの次元で受けることができますが、教会は三つの次元で受け取ります。一万人のクリスチャンがいることはひとつのことです。一万人のキリストの肢体が存在することはまた別のことです。その御自身の豊かさの中から、頭なるお方は有り余るほどの豊かさを与えて下さるのです。しかしそれを保持するためには、私たちはひとつの器、ひとつの体とされる必要があるのです。

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月30日

しかし、わたしはあなたがたにいう、あなたの敵の愛しなさい-マタイ5:44

わたしは人を憎んでいたひとりの男を知っています。その相手は彼に対してとても深い罪を犯していたのです。その傷があまりにも深いために、相手を殺してもなお足りないほどのように見えました。その傷を受けた男が主を知るに至りました。もうひとりの男はそれから数年たっても何もなかったかのようにでした。主を知った男は、ある時、ある地方に赴き、聖餐の礼拝に出席しました。彼が紹介されたその直後、彼はかつての敵をその集会の中に発見したのです。彼はつぶやきました、「あいつがここにいる！ やつは救われたのか、どうすべきだろうか？」。次の祈りの時間の最中に彼は静かに立ち上がって出ていきました。そこを立ち去り、歩いている間に、彼は一方で自分の救いについて、他方で自分が今も憎しみを抱えていることについて考えました。進むほどに集会を抜け出たことを思うと彼の気分は悪くなり、他方で自分の敵に対して怒りが募るのです。そして十年前の自分が救われた時のことを思い出し、主がどのように自分を赦して下さったのかを思い巡らしました。それでもなお、彼は敵を赦すことはできませんでした。しかし御霊はひとつの御言葉を彼の心に思い起こされました。「あなたがたが互いに愛し合うならば、世はあなたがたがわたしの弟子であることを知るようになる」と。すぐに彼は立ち止まりました。「主よ、赦して下さい！」と彼は叫び、向きを変えて、その頬を涙で濡らしつつ集会へと戻りました。戻った時、ちょうどパンを裂く直前でした。そこで彼は立ち上がり、すべてを告白し、神がどのようにして自分の心から憎しみを除いて下さったかを分かち合ったのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想

荒野に宴をもうけ（10月）

＝荒野に宴をもうけ＝

ウォッチマン・ニー

10月31日

神は光であって、神のうちには暗いところがない。-1ヨハネ1:5

ヨハネの福音書では主は人々の間において恵みと真理として御自身を現されましたが、書簡においては同じ主が光と愛として御父と共におられる方として見出されています。福音書において真理であられた方は、書簡では光なる方としておられます。福音書で恵みとしておられた方が、書簡では愛としておられます。なぜでしょうか？それは神にある光が人にもたらされる時真理となり、神にある愛が人にもたらされる時恵みとされるからです。真理と恵みがここにあります。光と愛とは神のうちにあったのです。そこで恵みを無駄にしたり、真理を誤って用いることがあり得るのです。人はこれらのことを自分勝手に誤って評価してきました。しかし神は光であり、神は愛ですから、あなたがその元に登り、それらに触れることはできません。それらは人が誤って取り扱うことはあり得ないのです。そこで失なわれたものを回復するために、物語を提供することをヨハネはしなかったのです。彼は私たちを御座に連れ戻し、その源たる方と直接に出会うことを意図したのです。私たちが最初のを回復し得るのは、その源へと回帰することによるのです。

ウォッチマン・ニーによる霊想